

# アトデとアトニ

深見兼孝

## 1. はじめに

本稿は、現代日本語の時間関係を表す表現の一つである、アトデとアトニの意味用法の違いについて考察したものである。

## 2. 先行研究と問題点

拙稿(2009)は、アトとマエの空間的意味と時間的意味の関連性を、その現れる環境と関連づけて記述しようとした。アトについては、何かの移動の結果、「足跡」のようにその後方に残ったモノを意味する『跡』の転用だと仮定し、アトに格助詞ニが付加されているときは、時間概念と空間概念の両方を含むこともあるが、多くは時間概念のみを表すとした。そして、修飾語を受けているときは、修飾語を受けてないときに比べ、助詞の付加なしに後続の節を導くことが多く、意味の抽象化が進んでいるとした。しかし、拙稿(2009)は、時間概念を表すアトに格助詞デが付加されているときと格助詞ニが付加されているときとで、意味がどのように違うかについては言及しなかった。

森田(1980)は、格助詞デの基本的意味について「それ以外・それ以上ではない、それを対象範囲の限度とする意(p.318)」を表すとし、時間に関連したものとして、「継続動作の時間的限度(p.319)」と、「時刻・時期を限定」し「その時刻・時期は終了点となる(p.321)」場合の二つ用法を挙げている。一方格助詞ニについては、「行為や作用・状態の対象・相手・成立点を…指定するときに用いる助詞(p.372)」とし、時間に関しては「行為・作用の成立時点を表す(p.372)」としている。

岩崎(1995)はこれを受け、時を表す格助詞デとニの違いについて、「ニ格はニ格につく名詞の表す時点を一点で表すのに対し、デ格はデ格につく名詞の表す時点までの経過を含意して達成・到達点を表す(p.78)」とし、「それぞれの格助詞につく名詞の表す時点をさす点ではニとデでは同じであるが、デにはその時点までの経過の含意があるのに対しニにはそのような含意がないという点で両者は異なる(p.82)」としている。

しかし、アトは、それ自体が時点を表すのではなく、それが受ける修飾句や節の表す出来事、あるいは文脈から理解される出来事と後続する節の表す出来事との相対的時間関係(後続する節の表す出来事がアト=未来)を表すので、「時間的限度」も「終了点」も「達成・到達点」も考えにくい。したがって「経過を含意」することもないだろう。実際、森田(1980)はアトデについて、「現在、もしくは話題の時点より後のあまり隔たらない時期に行為・作用が生起することを表す(p.180)」とし、「成立の確実な事柄、もしくは進んで後の時点に決定する場合(p.181)」に用いられるとしている。この見解には、「時間

的限度」等の言葉が用いられていない。

ところで、アトデが「進んで後の時点に決定する場合」に用いられるとしたら、意味の上で、後続節の動詞（述語）に何らかの特徴、特に動詞が意図的な動作を表すものと予想される。また、「現在、もしくは話題の時点より後のあまり隔たらない時期に行為・作用が生起することを表す」のであれば、アトデの前、もしくは後続節に短い時間を示す副詞が生起している可能性がある。そして、アトニにはこの2つの特徴が見られないか、そのような特徴とは無関係であると予想される。

そこで以下では、まずアトの前に表れる副詞と後続節に含まれる副詞、とりわけ時間に関わる副詞（それに相当するものを含む）の特徴を探り、続いて後続節全体の意味、特に動詞の意味的特徴を調べ、上の予想と森田（1980）のアトデに関する見解を検証したい。そして最後に、そこで明らかになったアトデとアトニの意味の違いが、格助詞デとニの基本的意味とどのような関わりがあるか考えていく。

### 3. データと分析

#### 3-1. アトデとアトニの頻度

16編の小説<sup>1)</sup>から時間概念を含むアトを抽出した結果356例が見つかった。これから、アトカタヅケのような複合語の成分になっているもの、アトカラアトカラのように慣用句を形成しているもの、およびアト2ジカンのように追加ないしは到達点までの距離を表しているものを除くと、316例であった。この316例中、アトデが56例（17.7%）、アトニが32例（10.1%）であった<sup>2)</sup>。

一見アトデもアトニも頻度は高くなさそうだが、格助詞の種類のみを考慮してみても、両者の頻度は高いと言うべきであろう。アトは時間的相対関係を表すので、格助詞デまたはニと結合して連用修飾成分（の主要素）として機能するのが代表的な用いられ方と思われる。実際、アトの後ろに結合する要素の頻度としては、何も結合しないのが1位<sup>3)</sup>、格助詞デとニの頻度がそれぞれ2位と3位であった。

また、上記のデータからアトニよりアトデの使用頻度が高いものと推定され<sup>4)</sup>、実際の使用においてアトニの方が有標的である可能性がある。これは、第2節でアトニの文の意味的無標性を予想したことと矛盾するように見える。しかし、実際の使用においては、意味的に有標な表現の方が高い表現効果を持つとして多用される可能性もあり、簡単に判断できない。アトデとアトニのどちらが有標的かは、本稿では追求しないことにしたい。

#### 3-2. 副詞

アトデの前に表れる時間を表す副詞、またはそれに相当するものとして、スコシ（2）、スグ（1）があった（かっこは用例数）。また、アトニの前に表れる時間を表す副詞に相当するものとして、イップン、ヒトアシ、フツカホドがそれぞれ一例ずつあった。また、

アトデの後続節にスグニが表れている例が一例あった。これら以外の時間を表す副詞またはそれに相当する語句は見あたらなかった。

スコシやスグは確かに短い時間を表し、森田（1980）の言う「現在、もしくは話題の時点より後のあまり隔たらない時期」に符合する。筆者の直感としてはズットアトデやカナリアアトデのように、基準時から隔たった時点も表せるように思えるが、実際の用法としては、基準点と隔たらない時点を表す方向へ片寄っているのかもしれない。しかし、残念ながら用例数が少ないために、森田（1980）の検証ができたとは言えない。森田（1980）は基本的に正しいであろうという示唆にとどめておかざるをえない。

一方、アトニの前に表れたイップンは、数詞による数量表現であることが注目される。数詞は具体的数を表すので、イップンも具体的数量を表す。フツカホドもホドを除けば同様である。ヒトアシは現代語で具体的数量を表すことはほとんどないと思えるが、それでもヒトアシのヒトが本来は具体的な数である「1」を表すことは容易に認識できる<sup>6)</sup>。やはり、スコシやスグに比べると具体性が高いと言えよう。筆者の直感では、スグアトニ、スコシアトニ、ズットアトニのような表現も可能だと思えるが、実際の用法としては、具体性の高い時間表現と結びつく傾向にあるのかも知れない。ただこれも、用例数が少ないので、示唆にとどめておくしかない。

### 3-3. 後続節の動詞

表1は、アトデ、アトニの後続節においてアトデ、アトニと構文上の関係を結ぶ動詞だけを取り出し、その用例数を示したものである。非存在のナイは厳密には動詞ではないが、アルとの関係で採用した。「本動詞+補助動詞」からは本動詞を取り出したが、補助動詞が本来移動動詞で、移動の意味が明確に残っている場合は、補助動詞の方を採用した。補助動詞がモラウの場合は、主語と対応するのはモラウの方とみなし<sup>6)</sup>、モラウを取り上げた。また、受け身形・使役形は、その主語がもとの動詞の主語とは異なるので、もとの動詞とは別に取り上げた。

アトデの後続節だけに現れる動詞は異なり語として30語であったが、そのうち73.3%（22語）、のべ用例数で73.8%（31例）が意志動詞であった。一方、アトニの後続節だけに現れる動詞は異なり語として19語であったが、そのうち52.6%（10語）、のべ用例数で52.4%（11例）が意志動詞であった。表中で意志動詞は網掛けで示したが、本来は意志動詞でも主語が無生物の場合は意志動詞とみなしていない。

この表から、アトデの後続節には意志動詞が現れる可能性が高いと言える<sup>7)</sup>。したがって、アトデが「進んで後の時点に決定する場合」に用いられる可能性も高いと言えよう。また、意志動詞なら「現在、もしくは話題の時点より後のあまり隔たらない時期に行為・作用が生起することを表す」という意味が生まれてくる可能性も高いという説明は可能であろう。一方、アトニの後続節に意志動詞が現れる可能性と、無意志動詞が現れる可能性

は、どちらが高いとも言えない。

表 1 後続節に現れる動詞

|         | アトデ | アトニ | 計  |         | アトデ | アトニ | 計  |
|---------|-----|-----|----|---------|-----|-----|----|
| ある      | 3   |     | 3  | なる      | 4   | 8   | 12 |
| あんないする  | 1   |     | 1  | ひかる     | 1   | 1   | 2  |
| いう      | 5   |     | 5  | 小計      | 8   | 11  | 19 |
| いっぶくする  | 1   |     | 1  | あらわれる   |     | 1   | 1  |
| おくる     | 1   |     | 1  | いきづく    |     | 1   | 1  |
| おわびする   | 1   |     | 1  | おそう     |     | 1   | 1  |
| かいさいする  | 1   |     | 1  | おりる     |     | 1   | 1  |
| かう      | 1   |     | 1  | かえる     |     | 1   | 1  |
| かかる     | 1   |     | 1  | くらす     |     | 1   | 1  |
| きかせる    | 1   |     | 1  | すみつく    |     | 2   | 2  |
| きく      | 5   |     | 5  | とる      |     | 1   | 1  |
| くる      | 1   |     | 1  | ない      |     | 1   | 1  |
| さけぶ     | 1   |     | 1  | なされる    |     | 1   | 1  |
| しかられる   | 1   |     | 1  | にゅうきよする |     | 1   | 1  |
| じゅっかいする | 1   |     | 1  | のこる     |     | 2   | 2  |
| しらべる    | 1   |     | 1  | のりこむ    |     | 1   | 1  |
| する      | 1   |     | 1  | のる      |     | 1   | 1  |
| そうだんする  | 1   |     | 1  | はけんされる  |     | 1   | 1  |
| つぶやく    | 1   |     | 1  | はっせいする  |     | 1   | 1  |
| できる     | 1   |     | 1  | ふれる     |     | 1   | 1  |
| とりかえす   | 1   |     | 1  | よこたわる   |     | 1   | 1  |
| ならす     | 1   |     | 1  | よぶ      |     | 1   | 1  |
| のべる     | 1   |     | 1  | 小計      |     | 21  | 21 |
| はじまる    | 1   |     | 1  | 計       | 50  | 32  | 82 |
| はらう     | 1   |     | 1  |         |     |     |    |
| もどる     | 1   |     | 1  |         |     |     |    |
| もめる     | 1   |     | 1  |         |     |     |    |
| もらう     | 2   |     | 2  |         |     |     |    |
| よばれる    | 1   |     | 1  |         |     |     |    |
| わかる     | 2   |     | 2  |         |     |     |    |
| 小計      | 42  |     | 42 |         |     |     |    |
| いく      | 2   | 1   | 3  |         |     |     |    |
| でる      | 1   | 1   | 2  |         |     |     |    |

しかしながら、アトデの場合も3割程度は無意志動詞が用いられており、「進んで後の時点に決定する場合」のみに用いられる訳ではないことが判る。また、無意志動詞のときも、なぜ「現在、もしくは話題の時点より後のあまり隔たらない時期に行為・作用が生起することを表す」という意味が生まれうるのか、説明する必要があるだろう。

## 4. 考察

### 4-1. アトニ

無意志動詞の主語は自ずと無生物を表す名詞が多いと思われる。次の例ではアトニの後続節の主語は無生物名詞である。動詞は物事の出現を表す動詞で、人の意志とは無関係な物事の変化を表す。

- (1) 本当はね、エヘエヘエへ……。』と書いた文字を読むような笑いだけを残して唇はひっこみ（唇だけか顔ごとか、それはよく分かりませんでした。）その後に大きな目玉が現われました。（壁02402）
- (2) 砂は指の間からさらさらと流れ落ちて、後になんの感触も残りませんでした。（壁02515）
- (3) 災害に対する一時の「伝統的」反射も、この災害の全貌がはっきりしてきたら、そして、そのあとに発生してくる膨大な問題の処理に直面したら……はたしてどこまでつづくだろうか。（日本沈没（上）36912）

ヨコタワルは本来自己制御によって姿勢を変化させることを表す。しかし、次の例では「魷」は死んでおり、自己制御は発動されない。ヨコタワルは状態に近い意味を持っていると思われる<sup>8)</sup>。主語は「躰」である。

- (4) 魷は死にものぐるいの最後の悪臭、凄まじい臭気をはなちながら絞め殺され、父のナイフの鋭く光る刃先で小さくはじける音をたてながら皮が剥がれると、そのあとには真珠色の光沢をおびた筋肉にかこまれた、あまりにも裸の小さく猥らな躰が横たわる。（飼育12208）

以上の例では、動詞は意志に関わらない変化か状態に近い意味を表し、主語は無生物名詞であった。

次の例のアトニの後続節の動詞オソウは無生物主語を取っているので、意志とは関わらない出来事（過程）を表す。

- (5) 港湾部では、接岸中の船舶が岸壁にぶつかり、芝浦の倉庫地帯で火災が起こった。  
—そして、そのあとに、おそろしい、まっ黒な津波がおそってきた。  
（日本沈没（上）34503）

動詞の受け身形は、動作主が主語（被動作主）とは別に存在し、一般に動作主の行為に対し主語の制御はない。したがって、動詞の受け身形が表すのも主語（被動作主）の意志とは関わらない過程ないし変化である。それは、主語が無生物（6）でも有生物（7）でも

変わらない。(7)は、「家政婦さん」が意味上の主語である。

(6)しかし、その貸借権の設定が、競売開始決定よりも後になされたものだった場合は、話は逆になります。(理由29805)

(7)私の後に派遣された家政婦さんだろう。(博士の愛した数式18114)

ここまで、アトニの後続節に現れるのは無意志動詞か、本来は意志動詞であっても、主語の意志が発現されていないなかった。すなわち、アトニの後続節は、その中の主語の意志とは関わりのない状況の移ろいや変化を表した。移ろい変化する状況は、話し手の外部に存在する。興味あることに、アトニの後続節の動詞が意志動詞のとき、その主語は2例を除いて、3人称であった。このことから、アトニの後続節は、主に話し手にとって外部の出来事を表すと言えよう。

しかし、主語が話し手である意志動詞の場合、次の例(8)の「二〇二五号室の抱えていた事情について、詳しく触れる」こと、例(9)の「彼をカウンセリング室に呼ぶ」ことは、当然話し手(主語)の意図的な行動であり、話し手(主語)の外部に存在するとは言えない。該当しない場合もあるとしなければならぬだろう。

(8)しかし、二〇二五号室の抱えていた事情について、詳しくは後に触れることにして、ここではまず、事件のおおまかな経過について振り返ってみよう。

(理由02114)

(9)「それで、お母さんとの面談から二日ほど後に、彼をカウンセリング室に呼びました」(理由20901)

3-2で、アトニは具体性の高い時間表現の修飾を受ける傾向があるかも知れないことを示唆したが、話し手にとって外部の出来事は客観的に眺めることもでき、その分具体的に「どのくらいアトか」を述べやすいという説明が可能であろう。

#### 4-2. アトデ

アトデの後続節だけに現れる動詞は、意志動詞に偏っていた(3-3)が、それに加え注目されるのは、話し手自らの意志を表明する例が見えることである。自らの意志の表明は、話し手がその行為・出来事の成立に対しコミットするということである。次の例(10)、(11)では話し手は、それぞれ、自身が「D計画の総司令室へ案内」すること、「お詫び」をすることが自らの意志で成立することを表明しており、それが確実であることを確信している。あるいは、そのような態度で聞き手に臨む。

(10)「あとで、このD計画の総司令室へ案内します。(日本沈没(上)27904)

(11) あとでお詫びしようと思っていたのですが、実はそのとおりなんです。(壁03107)

次の例は意志の表明ではないが、話し手は「隊長から通知があること」を知っており、その実現を確実なこととして表明している。やはり、話し手は「隊長から通知があること」に対してコミットしている。

(12) あとで、隊長のほうから、通知があるだろう。(日本沈没(上) 06308)

このような例は全部で11例あり、アトデの後続節だけに現れる動詞ののべ用例数中26.2%を占める。資料が小説なので、地の文が多く、地の文の主語は多く3人称で語られることを考えれば、少ない数ではないだろう。アトニの後続節で同様の例と言えるのは、4-1の例(8)だけであった。また、次のような他者に対する願望や依頼の表現も、その事態の成立を自ら望んでいることを表明している点で、その事態の成立にコミットしている。

(13) あとでママに言っといてほしいんだけど、今夜のここの勘定、おれにつけといてほしいんだよね(文学部唯野教授08704)

(14) 「あとで聞かせてね」といて、ホステスは立ち上がった。  
(日本沈没(上) 11611)

一方、次は無意志動詞が用いられた例であるが、その行為は話し手に向けられている。その意味で、話し手は当事者の一方であり、第3者的立場で外部の出来事として見るわけにはいかない。

(15) 後で社長にも叱られました。(理由28914)

(16) 彼のあとで私は呼ばれた。(白い人18206)

次の例では、話し手に向けられた行為ではないが、その事態に巻き込まれている。その事態は話し手にとって単なる外部の出来事ではなく、やはり第3者的立場にはいられない。

(17) あとで商店街組合のなかが揉めて大変でした。(理由01804)

次の例では、「電話がかかってきた」という主題(貴子)に向けられた出来事を表している。小説の地の文では、話し手(語り手=作家)は主題(貴子)に視点をおいて事態を述べていると考えられ、主題に向けられた出来事は話し手に向けられた出来事に他ならない。

(18) その夜は、貴子は信治には会うことができなかったわけだが、あとで彼から電話がかかってきた。(理由08016)

このような、話し手が事態の当事者であるか、その事態に巻き込まれて、第3者的立場、外部の立場ではいられない状況は、アトニと対照をなす(4-1参照)。その事態の当事者であるか、その事態に巻き込まれるということは、その事態の事実性を前提にしており、話し手は事実性にコミットしていると言うことができよう。次の例では、作中の話し手は「要吉君」を弁護し、「さと子さん」の非を暴こうとしている。「要吉君と静代との交渉がはじまった」こと(や一連の出来事)が事実であることにコミットしており、傍観者的な立場にいるわけではない。

(19) つまり、さと子さんの拒絶の状態が半年ばかりつづき、そのあとで要吉君と静代との交渉がはじまったのです。(一年半待て50210)

次の例では、話し手はベットの賢さを自慢しており、その事実についてコミットしている。

(20) 家には、ロッキーという茶色の犬がいて“お手”と“ごめんくださいませ”と、  
ごはんのあとで、“満足、満足”が出来ること。(窓ぎわのトットちゃん03110)  
このように、アトデの後続節は話し手はその事態の成立や事実性にコミットしていることを表すのが専らである。まとめて話し手の事実性へのコミットと呼んでおこう。事実性へのコミットがあるために、確実なことは遠くない将来に起こるという思考が働き、「現在、もしくは話題の時点より後のあまり隔たらない時期に行為・作用が生起することを表す」という意味も生まれてくるという説明が可能であろう。もちろん、話し手の事実性へのコミットが常に明確に現れるとは言えないが、アトニの後続節と比べれば、相対的にはっきりしていると言えよう。

#### 4-3. アトデとアトニの比較

同じ動詞がどちらの後続節にも用いられている場合を比較すると、話し手の事実性にコミットする程度の違いが伺えることもある。次の(21)はアトデ、(22)はアトニの例であるが、どちらの後続節にも動詞イクが用いられている。イクは本来自己制御による移動を表す動詞である。しかし、(21)が話し手の意志の表明であるのに対し、(22)「散歩へ出た」は話し手の意図的行為ではあるものの、特に予定していたわけではなく、何気なく行った思いつきの行動と解釈できる。話し手は自らの行動を事実として語ってはいるが、その分話し手自身のその行動に対するコミットは低くなるだろう。

(21)「嘘じゃないわよ、その証拠に、あとでおばさん家にママを連れてく。

(理由14308)

(22) みんな、なぜかすごく早寝の人ばかりなので、超夜型の私にはもの足りなくて、みんなが寝に部屋へ解散した後にひとりで目の前の浜へ散歩へ行った。

(キッチン14212)

このように考えれば、4-1の例(8)(9)((23)(24)として再提示)の話し手の行為も、「後日機会があれば」(23)、「二日ほどに後たまたま機会があったので」(24)というニュアンスが読み取れる。特に(23)では、「ここではまず」とあるように、話し手は今のことに集中しており、今後いつ「二〇二五号室の抱えていた事情について、詳しく…触れる」かは計画されていないと解釈できよう。

(23=8) しかし、二〇二五号室の抱えていた事情について、詳しくは後に触れることにして、ここではまず、事件のおおまかな経過について振り返ってみよう。

(理由02114)

(24=9) 「それで、お母さんとの面談から二日ほど後に、彼をカウンセリング室に呼びました」(理由20901)

また、次の(25)はアトデ、(26)はアトニの例であるが、どちらの後続節にも動詞デルが用いられている。デルは出現動詞としても移動動詞としても用いられる。前者は無生



物名詞が主語になり、その物の非存在から存在への変化を表す。後者は有生名詞が主語になり、その意図的な行為を表す。(25)は大学教員である話し手が授業で作品の解説をしており、その事実性に話し手はコミットしているだろう。これに対し、(26)の「ルリ子」の行動は、「ルリ子」の意図的な行為ではあるが、それは仮想された行為であり、事実ではない。しかも、仮に事実だったとしても、その「ルリ子」の行動は話し手にとって予期しない、話し手の制御外にあるものと解釈できる。

(25) だからこれは、わからないところだって、文章を次つぎによんでいくにつれてやがてわかる筈だということを意味しているのであって、事実そのあとで『駅長』とか『鉄道の官舎』だのといったことばが出てくるわけだから、『信号所』というのも、これは即ち昔の国鉄即ち今のJRの『駅の一部』か『駅の近く』が『駅そのもの』のことであろうということがわかってくる。(文学部唯野教授191115)

(26) (もし、ルリ子が一分あとに家を出ていたならば、犯人の佐石と顔をあわすことはなかったらうに)(氷点(上)05818)

以上のように、アトデとアトニの違いは、後続節の内容の事実性に対する話し手のコミットの程度にあると言えよう。

このようなアトデとアトニの違いは、格助詞デとニの違いに求められる。アトデの場合、話し手が何らかの事態の事実性にコミットするには、その事態の成立が、その事態の成立する特定の時間域(何かのアト)の存在に裏打ちされている必要があるだろう。話し手は事態の成立をその時間域と強く結びつけ、その時間域においてのみそれが事実である、その事実性が有効であると認識するからこそ、それについてコミットできると思われる。すなわち、その時間域はその事態を存在を可能にする要素であり、その事態はその時間域の中でのみ成立するのである。格助詞デは時間域の限定を行っていると言えよう。これは、結局森田(1980)の言う格助詞デの「それ以外・それ以上ではない、それを対象範囲の限度とする意(p.318)」に繋がる。これに対し、ニは単に「行為や作用・状態の対象・相手・成立点を…指定するとき用いる助詞(森田1980:372)」なので、アトデのような用法は生まれないのであろう。

## 5. おわりに

アトデとアトニの差は、後続節の内容の事実性に対する話し手のコミットの程度に求められ、それは格助詞デとニの違いに帰結できた。これにより、先行研究で指摘された点も、(検証できなかった点も含め)一応の説明ができた。しかし、アトデ、アトニの先行節、あるいは文脈上それに相当する部分については触れることができなかった。今後の課題としたい。

## 注

- 1) 拙稿(2009)で使用した小説に次の2編を加えたものである。ただし、『理由』は全21章のうち1章から7章までを使用した。出典の後の五桁の数字は前三桁が該当個所のページ、後二桁が該当個所を含む文の行を表す。
  - ・小川洋子『博士の愛した数式』新潮文庫お-45-3. 新潮社. 2005年.
  - ・宮部みゆき『理由』新潮文庫み-22-13. 新潮社. 2004年.
- 2) 格助詞デ、ニの後に他の助詞が結合している場合も含めた。ただし、デモはデ+モではなく、デモという助詞とみなし除外した。
- 3) 118例(37.3%)であった。
- 4) 有意水準0.05でアトデの出現率は0.135から0.219の間 ( $n=316$ ,  $u=0.3816687$ ,  $Z(0.05/2)=1.96$ )、アトニの出現率は0.068から0.134の間 ( $n=316$ ,  $u=0.30132872$ ,  $Z(0.05/2)=1.96$ )と推定される。
- 5) 新村出(編)『広辞苑』(1991年版、岩波書店)の記述に基づけば、ヒトアシは「一步」>「短い距離・時間」のように意味が変化してきた。ただし、現代語でもヒトアシが「一步」の意味で用いられるとすれば、「意味が拡張してきた」と言うべきであろう。
- 6) 次の例のように、補助動詞モラウは、主語(子供)が相手(母親)に働きかけを行い、その結果本動詞ヨムの表す相手(母親)の行為が引き起こされ、それによって主語(子供)が利益を得る受益者であることを表す。また、モラウは謙讓性においてイタダクと対立するが、謙讓性は主語に関わる概念であるので、モラウ(イタダク)は主語と呼応すると言える。このように、補助動詞モラウは意味的にも構文的にも主語と対応すると判断した。
  - ・子供が母親に本を読んでもらった。
- 7) 現代日本語において意志動詞と無意志動詞のどちらが多いか不明だが、のべ数に関して同じ確率で出現すると仮定した場合、アトデの後続節だけに現れる意志動詞の、のべ用例数における出現率0.7(73.8% = 0.738の少数第2位以下を四捨五入)は有意水準0.05で偏りがあると言える ( $n=31$ ,  $T=2.22710574$ ,  $Z(0.05)=1.64$ )。
- 8) 次のように、ヨコタワルは擬人化されているのでなければ、無生物の姿勢変化を表すとは言い難い。
  - ・\*木(\*棒、\*橋、\*川)が横たわった。さらに、橋や川は現実世界では姿勢の変化を想定することすら難しい。ヨコタワルは無生物に適用されると変化の意味合いが消失し、その結果、地表と平行に存在するという状態的意味になるのかもしれない。あるいは、無生物に対しては姿勢(変化)という概念を適用すること自体が誤っているのかもしれない。この問題は別途考察するしかないだろう。

## 言及した文献

- 岩崎卓(1995)「ニとデー時を表す格助詞」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上)単文編』pp.74-82. くろしお出版.
- 深見兼孝(2009)「日本語における時間用法としてのアト、マエ」『広島大学留学生センター紀要』19. pp.1-10.
- 森田良行(1980)『基礎日本語2』角川書店.